

Samuel Pepys の日記でみる オランダ艦隊の Chatham 攻撃

——『シルヴィアの恋人たち』第5章、
第38章への注釈として——

岡 照 雄

太平洋戦争末期の1945年7月30日の夜半こと、突然の砲声とともに清水市はげしい艦砲射撃を受けた。当時、清水市折戸に清水高等商船学校（現東京海洋大学の前身）があり、生徒だった人がしばしば恐怖を以てわたしに語ったのが、この艦砲射撃のことであった。当時の日本は制海権、制空権を喪失し、アメリカ軍艦が近海を我が物顔に遊弋して、釜石、日立などを砲撃していた。清水市民で、この夜の砲撃の研究をする渡辺晴朗氏が、砲撃をした軍艦の種類の考証を試みた書物を出版している。「ハルヲの戦争、清水艦砲射撃—潜水艦ではない」がそれで、著者は高等商船学校教授のご子息で、教員官舎に住んでいた。駆逐艦7隻による艦砲射撃だった、というのが渡辺氏の結論である。

さて、ジョン・ドライデンの「劇詩論」(*An Essay of Dramatic Poesy*, 出版登録1667, 初版1668)の冒頭にはイギリス・オランダの艦隊の砲撃戦の砲声が聞こえる。「それは、あの記念すべき日のことだった、」ではじまり、「両艦隊の打ちだす砲声は、われわれロンドン市民の耳にも達し、不安に駆られた人々は、今こそ決戦の時と、戦況の帰趨をうかがわんものと、各自思いのままに砲声の方向へと足を向けた。そのためにロンドンの街に人影は消え、云々」(小津次郎訳)と続くのであるが、この日は1665年6月3日のことで、ロウストフト沖海戦とも言われる。わたしの今日の主題は、それからちょうど2年後の1667年6月中旬、つまり、ロウストフトから2年と1週間後の戦いである。それはオランダ艦隊のメドウエイ河侵入とチャタム軍港とその施設に対する艦砲射撃によって、オランダ側の一方的勝利に終わり、英国海軍はこともあろうに旗艦のロイヤル・チャールズ号を捕獲、曳航されるという不始末、屈辱を味わったのである。この軍艦は1660年の5月に、革命に逐われて亡命していた皇太子チャールズをオラン

ダからドーヴァーに迎えた名誉ある軍艦で、それを記念してチャールズがネイズビーという艦名をロイヤル・チャールズと新たに命名したのであった。さらに言えば、有名な「日記」の筆者サミュエル・ピープスも歓迎艦隊司令官の秘書としてこの軍艦に同乗していた。その捕獲の確報が海軍高官となっていたピープスに届いたのは6月13日の早朝である。奇妙にも、ロウストフトの勝利の日を書き出しとする「劇詩論」はチャタム敗戦のまさにその年に出版登録されたのであるから、風刺家のドライデンの心中には何らかの政治的意図があったのかと疑うことさえできる。一方、チャタム敗戦の年の秋に出版されたアンドルー・マーヴェル作の「画家への最後の指示」は、時の政治、海軍への正面切って風刺、攻撃である。

さて、67年のイギリス海軍敗北については、意外にも昭和天皇のご存じであった。侍従武官長だった本庄繁大将の「本庄日記」（明治百年史叢書、原書店、1967, 95）を読んでいて、昭和8年9月25日の記事に次の昭和天皇のお言葉があることをわたしは知った。

「往時、和蘭が尚旺なりし頃、名将「ルイトル」¹ 將軍は海軍を率ひ、英海軍を撃破し、テイズ河口内までも進入せしに拘らず、其後、和蘭陸軍の形勢悪しく、之を増す為め海軍を縮小せしことあり。之が為め名将「ルイトル」將軍も施すに術なく、遂に和蘭を衰微に導きたることあり、故に、軍備は縮小すべからず、去りとて国家財政の不均衡を来すが如き増兵も許すべからず、其調節こそ誠に重要なりと宣はれたり。」（249頁、原文カタカナを平仮名に直し、1字修正）

昭和天皇は物知り、好奇心の強いお人柄であったようで、「テイズ河口内までも進入せし」とあるのはチャタム軍港攻撃のことである。

英仏海峡からテムズ河口に入り、遡航してロンドンに向かって少し進むと、左手にメドウエイ河の河口が見える。河口左手の低地がシアネスの町である。先に言及したマーヴェルの作品では、「テイズ河口内までも進入せし」オランダ海軍司令官のロイテル提督がメドウエイ川との分岐点に達するまでのテムズ河畔の

美しさを眺め、感嘆する箇所があるが、ロイテル司令官が見たのと同じ場所をわたしも船から五十年前に眺めていた。神戸を出帆して45日目である。

「画家への最後の指示」の冒頭で英国政府と政治家を長々と、ときに猥褻な言葉でこきおろしたマーヴェルは523行目から一転して、いま述べたようにロイテルが美しいテムズ河畔を眺める‘*Surveyed their crystal streams and banks so green*’にはじまる田園詩的な描写に移り、「オランダ海軍は滑るように進み、船腹に積んだ嵐をシアネスに降ろした」(And at Sheerness unloads its stormy sides.)という。「東インド貿易で栄えるオランダが、シアネスの岸に積み荷を降ろした、」というのだが、‘unload’という語は「積み荷を降ろす」とともに「砲弾を発射する」という意味があり、英・蘭の貿易戦争にぴったりの使い方ではあるまいか。オランダの艦船は東方の香料や珍しい織物ではなく、満載した爆薬をシアネスに打ち込んだ。こうしてマーヴェルは川辺の美しさから艦砲射撃の場面へと突如転換するのである。

さてシアネスはメドウエイ河とテムズ河が接する地点にあり、スペンサーの「フェアリー・クイーン」では、テムズとメドウエイの両河の結婚と、その祝いに参加する世界中の河づくしという趣向でも知られている。この話もマーヴェルはちゃんと利用している。昔のめでたい結婚の床が敗北により汚されて、「年老いたテムズが卑しい足かせに縛られ、貞節なメドウエイが彼の目の前で陵辱された」という。歴史の巡り合わせというべきか、敗戦の跡を調査のためチャタムに出張した海軍官僚のピープスは、その帰途の7月1日にロンドン向かう馬車のなかで‘the several Advices to a Painter, which made us good sport’を読んだ。「画家への助言」のジャンルに属する政治風刺詩類をいくつか読んだ、というのである。やがて秋に、自分が要職を占める英国海軍とチャタムの敗戦が、同じジャンルに属するマーヴェルの作品の主題となって我が身に降りかかる皮肉な運命になった。

オランダ艦隊は1667年6月10日過ぎにシアネスからメドウエイ河に進入し、水中の防禦用鎖チェインズや沈められた閉塞船を突破して、奥に位置する軍港に停泊する英国軍艦や港湾施設、造船所などを散々砲撃し、破壊した。シアネスにはオランダ

兵が上陸して英国の守備隊を追っ払い、町を一時占拠した。水陸の敗戦の屈辱の極みは、さきに述べたとおり、英国艦隊の旗艦たるロイヤル・チャールズ号が捕獲され、オランダ軍に曳航されたことであった。ピープス「日記」では、オランダ側は9人乗りの船で旗艦に接舷して乗り込み、捕獲したが、そのとき、この旗艦の乗組員は1名もいなかった。つまりみな逃亡していた。乗船したオランダ水兵は英国国旗をおろし、ラッパ手が“Joan's placket is torn”（ジョウンのスカートが破れた）のメロディを吹奏した。かれらは艦を巧みに傾斜させて障害物を越え、ほとんど浸水なく脱出した。オランダ艦船にはイギリス人が多数乗り込んでいて、英語を使っていた。「今までは英海軍の金券をもらっていたが、これからはオランダから給料をもらって戦う」と口々に叫ぶ彼等の声が聞こえた、とピープスは書くが、チャタム軍港から来た男はたしかそう言ったと思う、という伝聞である。しかし、オランダ艦隊を誘導するパイロットの英国人がいたことは確かであった。

メドウェイ河沿岸を地図で見ると、兩岸から粘土質の土壌が大幅に水中に流れ出て水路を狭くしている部分がある。その部分を **Ooze** と呼ぶようである。地図にはそれぞれ地名と連結するウーズの名称が示されている。たとえば、両国ウーズ、伏見ウーズというように。河や河口の床に沈殿する泥がウーズである。メドウェイ河北岸のアプナーにある軍港防衛用の砲台真下の水際にわたしは降りて、手にその泥をすくってみたことがある。ねばねば、どろどろした柔らかい泥である。この泥土が至るところで見えない水路に突出しているから、オランダ艦隊には河をよく知る英国人のパイロットがいたのである。地図を眺めると、河口近辺には **flats, sands, marsh, creek, knock** が付く地名が見受けられ、**danger zone** との表示もあり、このあたりの地理的状況が判る。すこし脇道にそれるが、7月には同じくオランダに面する英国の港町のハリッジにオランダ軍が上陸し、ここでは戦闘の末に彼らは撤退した。このときの指揮官が「背の高い英国人の大佐」だったとピープスは「日記」に書いている。宗派的対立があり、兵士の給料の未払いは日常のことであるから、オランダに亡命、逃亡した英国人、水兵もかなりいたのであろう。そのハリッジであるが、オランダ海軍がイギリスに出撃するとき、ハリッジ沖で発見される。「敵艦見ゆ」はここ、と決まっていたように見える。1970年頃にわたしはハリッジ港からフェリーに乗ってオランダに渡ったこ

とがある。夜 10 時に出港すると、翌朝 7 時頃にオランダのフック・ヴァン・ホランド港に入港した。わたしは、ハリッジ港でオランダの電器会社フィリップス社の社名を印刷した梱包の山を見て、いまはここがオランダ軍ではなく、電器製品をはじめオランダ商品の上陸地点か、と思った。

次の話題として閉塞用の鎖のことをすこし述べよう。1667 年 6 月 10 日から約 1 週間の戦況はピープス「日記」にいきいきと記述されていて、白田昭氏がその著「ピープス氏の秘められた「日記」」（岩波新書、1982）でその要所にふれている。12 日のチャタム軍港幹部からの報告では、メドウエイ河には強固な防禦鎖を設置したので、敵の大型艦が侵入を図っても安全で心配無用、という話であった。ところが、その舌の根も乾かぬ翌 13 日には、鎖が簡単に切断、突破されたとの急報がピープスのもとにとどき、海軍本部は大混乱となる。狼狽して、予算払底のとき貴重な軍需品を満載した船まで閉塞用に沈めてしまったという悲報も来た。東からの強風と大潮の逆流で鎖が切れた、というのがピープスのもとに入った言い訳である。その間に支給が遅れた水兵の給料を、数隻分だけ責任者があわてふためいて配ってまわる、という始末であった。

事態が一応の沈静化した 6 月下旬のこと、ピープスが海軍省幹部と現地視察に赴いたときも、一応の調査はしたが鎖の切断箇所は判らずじまいであった。誰にたずねても知らないという。「日記」文面をよく読んでみると、そもそもこの現地視察を本気でやったのか怪しい。アプナー側に上陸して鎖の末端を見はしたものの、実際に何が起こったのかははっきりしない。鎖の直径は 6 インチ 4 分の 1 である。「日記」の編集者による注では、品質の悪いスペイン鉄を使っていたという。海軍事務局長のピープスは輸入鉄の相対的品質について研究してはいたが、ここは彼の直接責任ではあるまい。マーヴェルの詩も鎖の強さに言及していて、**frail chain, engine so slight**, とか、**fitter seemed to captivate a flea (586-88)** と責めたる。鎖を上げ下ろしするためのクレーン小屋を敵が焼いていた、とピープスは書く。このあたりの記事は曖昧さを残しているうえに、実験好きのピープスが実際に切断箇所を確認しなかったのも納得がゆかない。「日記」を読むと海軍・造船所出入りの業者の不正、ごまかし、賄賂の記事はいくらでもある。ピープス本人が関与した場合も多い。すると、鎖のくんだりでも、そもそも本当に鎖を

設置していたのか、予算を取っておいて、それを誰かが懐に入れていたの
はいか、品質のごまかしはなかったのか、とさえ勘ぐりたくなるのである。6月30
日にピープスは鎖の末端を見た、と「日記」に書いているから、設置はしていた
のであろう。そこまでは認めるとしても、すわ一大事、というときに鎖ははたして
所定の深度まで引き揚げられたのであろうか。引き揚げ前にクレーン小屋が攻
撃されていたのではあるまいか。荒唐無稽の想像だが、怠慢の証拠隠滅のため、
英国側がクレーン小屋を事後に破壊したのではないか。実はピープスもある種の
疑いを抱いた形跡がある。行間を読めばそういう推測もできるのである。だが、
これはわたしの下司の勘ぐりにしておこう。

これについて次のような事情がある。馬車のなかで「画家への指示」系の詩を
読みつつロンドンに帰ったことはすでに述べた。ロンドンに到着するやいなや、
ピープスは海軍大幹部の弁務官ブランカーに書簡（その実物を岡は見たことがな
い。注釈者の説明に拠って以下のことを述べる）を送った。鎖切断の情報は確か
でしょうか、とピープスはやんわり説明と確認を求めたのである。この書簡は穏
やかに、丁寧に書かれているそうである。チャタム駐在の弁務官ペン氏の話を開
いてピープスの疑念がますます深まったらしい。おなじく注釈者によると、ブラ
ンカー弁務官宛のこの書簡でピープスは、船を鎖にぶつけて強度を実地に試した
のでしょうか、とも問うているそうである。手紙実物を読まずに言うのだが、ロ
イヤル・ソサイエティ会員で、実験を好むピープスのことだから、いかにもあり
そうな話である。ブランカー卿はその返事で、現場の者たちも切断されたと言っ
ている、自分もその意見だ、と答えたという。このときにピープスは「日記」に
はっきりと書いている、「卿の手紙を部下に命じて役所の手紙簿に記録させたが、
もう一度確認のため読んでおく必要がある」と。彼はもうこのときに海軍上層部、
議会筋からの責任追及を予測して、この件とブランカーの返事は弁明のための大
事な資料だと思ったに違いない。後日のために、上役の弁務官の責任をしっかり
確認しておこうという腹である。こういう点ではピープスは極めて敏速で、す
でに6月18日、まさに敗戦の直後に部下に命じて急ぎ身のあかしになるような書
類を収集させていた。もちろん、彼の細心、小心、小狡さだけを責めるわけには
いくまい。「日記」の至る所に、上司、同僚、部下に自らの失敗そのもの、失敗

責任をなすりつける実例がいくらか出てくるからである。それにしても、鎖突破直後の6月13日に、さきのロンドン・シティの大火で、燃えさかる火に追いまくられ、どう逃げたらいいかわからなかった。今のわが国と海軍の情けないありさまは、あのときとそっくりだ、と言ひ、続けてこう書いている。「今度は、東からの強風と、二つの河に押し寄せる大潮の逆流が敵艦の侵入を防ぐはずの鎖を切ってしまった。」と。これは天災だ、自然の力がオランダに味方したのだ、と諦め、自分を納得させる口調である。しかし、5日あとの6月18日には当初の衝撃から立ち直り、約半月が過ぎてやや落ち着き、現地を視察してみると、風と波で切断される鎖とはいったい何か、と考えはじめたのである。これが6月30日のことである。品質の吟味と発注の仕方に問題はなかったか、現場の工事に手抜きはなかったか、管理運用はどうだったか、という気持ちが生まれ、自分に対する責任追及をどう回避するか、を考慮する余裕ができた、と読むことができる。

変な話をもうひとつ挙げよう。沿岸のUpnor Castleについては、「長時間の攻撃を受けたというのに、損害の跡が見えない。わが方も砲側に弾丸がなくなる寸前まで応戦したのだが。砲弾の備蓄がなくなっているのだ。」(30日)とピープスは書く。大砲すべてが破壊されるまで応戦したというのに、「損害の跡が見えない」とは奇妙である。海軍省調査団に対してチャタム現場の責任者は大いに奮戦したと説明したのであろうか。

敗戦の原因としては、海軍予算の逼迫で水兵の給料も払えず、軍備も弾薬も買えなかった、という事情は分かりやすい。砲声が聞こえるなかを海軍幹部が未払い給料を数隻の軍艦に配ってまわる。だが、大混乱のなかでそれも果たさず、すごすごと持ち帰った、というありさまである。しかし、その根本に当時の政界、政治家の無能・腐敗と英国海軍の構造的な欠陥があった。この時期のピープスの「日記」に目立つ用語を使うと、GrievancesやMiscarriagesの続出である。幹部から水夫に至までみなが不満を訴えていた。海軍幹部のひとりピープスも秋、10月22日には「敗戦責任調査委員会」(the Committee of Miscarriages)に出頭を命じられ、委員たちからつるし上げられた。敗戦と敗戦処理の騒動のなかで、

国王の弟ヨーク公爵の息子のケンブリッジ公爵の死が6月22日の記事に見える。この死が10年あまりあと、政界を揺るがす大問題を引き起こす主な原因になるであろうことは、このはまだ誰も知らないが、それは別の長い物語である。ピープスはまず自分を護ることを考えつつ、一方では事後処理、戦後処理に注意を向けはじめる。では英国政府はどう政策を転換するか。オランダのブレダですでに進行中の英蘭平和条約をもうすこし真面目に考える時期が来たのである。オランダはフランスとの陸戦にそなえ、英国との講和を必要としていた。この度のチャタム侵攻は講和への圧力であったし、英国もこの敗戦の結末をつけねばならない。そこでブレダ平和条約が成立する運びとなるのである。

英国国内では、王政復古以来の権力者、大法官のクラレンドン伯爵が諸々の不祥事の責任者として辞任、亡命に追い込まれる。ここでわたしにもっとも関心があるのは長老派の復活、言い換えると、政府の長老派に対する政策転換、融和政策の採用で、このトピックがピープスの「日記」に頻繁に出現するようになる。一宗派が現実の政治と政策にどういう影響力を持つか、がいきいきと描かれていて、概説書や教科書に見られぬ現実感を伴って迫ってくるのである。(おわり)

註

1. Ruyter, Michiel Adriaanszoon de, 1607-1676.

(京都大学名誉教授)